

## 『女誠扇綺譚』における台湾女性像

謝 蒨 儀\*

### 一、はじめに

一九二〇年の夏、二十九歳の日本作家佐藤春夫は六月末から十月上旬にかけて、三か月に渡る「植民地の旅」に出た。中国の福建省を含む異郷の植民地台湾への初旅を機に、佐藤は十数篇の小説、紀行文、随筆、詩などを書き下ろした。台湾と関わった作品の中で漢民族を中心に作ったものは多角的である。それらの作品の中で一際目立っているのが、『女誠扇綺譚』である。伝説が語り継がれる荒廃した家で愛のために大胆に男と密会する女が許されない恋をする。「恋の行動力」を強調し、他人の目線をも気にせず、愛しい人と会って、禁忌の恋をする。「自由恋愛」という点もこの作品の中で描かれていて、穀物商のもとで養われた下婢が、日本人との結婚を迫られ、自殺する。その中で、当時台湾社会のある旧習も現されている。この「下婢」は、台湾語で「查媒嬬」と呼ばれる<sup>1</sup>。台湾でしばしば批判の対象となった旧習である。昔の中国からそういう習俗が存在し、台湾に伝来して、清朝の時に修正しようとしたが、いまだに残っている。

「女誠扇」は作中のテーマでもあり、女性が守るべき道徳的な戒めが書かれた扇を意味する。「綺譚」は面白い話という意味である。タイトルを文字通り解釈すると、女性が守るべき道徳的な戒めが書かれた扇をめぐる面白い話、となる。そこに中国風の小道具が登場しているということ

になる。『綺譚』の中で、廃屋に残された「女誠扇」に書かれているのは曹太家の「女誠」の一節である。『女誠』は後漢の班昭が書いた中国の女訓書であり、最も広く普及した。『女誠』の専心章は、女性の再婚を戒めるものである。作品では、発狂してなお婚約者を一途に待ち続けて死んだ沈家の娘の生涯を象徴するものであろう。「作品のプロットを構成する謎解きから事件の解決まで、ストーリーは扇を媒介に、女性をめぐるダイナミックに動いていく。」<sup>2</sup>と姚巧梅が評している。「女誠扇」は沈の娘にとって親の訓誡と婚姻の信条であるが、習俗に抗して愛欲に溺れる「奔放無智な娘」が手にする時には、書かれた婦徳は会得されず、恋人を扇ぐ愛情表現の道具に転じる。

また、民族主義に対する関心を持っている佐藤春夫が書いた『女誠扇綺譚』で、作品の最後に台湾人は内地人との結婚が嫌いという問題を焦点において、『女誠扇綺譚』には、植民地台湾の現実と将来に対する強烈な関心があり、台湾人下婢の自殺を通して台湾ナショナリズムの誕生を逆説的に宣告した」と藤井省三が論じた<sup>3</sup>。台湾民族主義の色彩を一層添える。本稿では、二人の女性がそれぞれの育てられた環境に影響されて、自分の意志による行動を通して、台湾女性のどんなイメージを読者に伝えようとするのかを探求したい。

### 二、資本主義と封建主義のもとに生きた沈女

日本人記者に設定された主人公の「私」と台湾人の親友である「世外民」が台南の街で遊覧して

\*国立台湾大学院生

いる時、ある豪壮な廃屋を見つけ、廃屋の外にいた老婆の口を通して、その沈家の盛衰と沈家の一人娘の悲しい人生を知った。沈女は、資本主義のもとに財を成した豪商の娘で、生まれた時から努力もせず、お金や地位などを与えられ、何の憂いもなく成長してきた。表面的にみれば、資本主義の利益を得る者である。そのような娘は、オランダ統治時代の十六世紀から台湾の貿易や国防の要地である、安平港に生まれた。鄭氏政権の時、台南は東都となり、一層重要性が高まっていく。沈家はこの地区で貿易を営んで、当地の名門になった。こうした家庭で豊かに成長した沈家の娘は資本主義社会の受患者とも言えよう。

そして、老婆の口を通して、沈女の祖先はお金や利益のために、何でもする資本者であったことがわかった。財産のために、人の命に関わろうが、奪えるものは奪うという沈家である。沈家の祖先は自分の行いの悪さを自覚しており、子孫にアドバイスをするが、運命は逃れられなかった。たった一晩で豪商である沈家は天災によって転落したのである。家運が傾いたため、沈女は縁談の約束を破られ、狂人になった。その故に、精神錯乱になった沈女はいつも美しい着物を着て、婚約者の来る日を待っていた。廃屋に来た人の足音を聞くたびに、婚約者が帰ってきたと思って、泉州語で「どうしたのです。なぜもっと早く来て下さらない？」と呼びかける。待つ時間は二十年に及んだが、順調な生活を送り、何の憂いもないはずの資本主義者の娘である沈女の花嫁姿の屍体が村人に発見された。その後、廃屋に幽霊がいるという噂が街の隅々に流れていた。婚約を破った男と古い観念に縛られた沈女は最後に気が狂って死んでしまった。

植民地としての台湾とアジア圏に属した日本は昔から中華文化の影響を受けて、近代化によって、欧米の思想もどんどん入ったが、「日本文化には、欧米の影響下で近代化を成し遂げた意識のレベルがある一方、いわゆる封建的と言われる古風な儒

教的な意識のレベルもある。」<sup>4</sup>とされている。資本主義の受患者と言われる沈女は生活上に何も悩まず、豊かに育てられて、順調に一生を送るはずだった。しかし、昔から封建主義下の産物である伝統的観念を受け継いだ彼女は、家族や一族内での權威や全体社会での政治権力が男性の手中にある父権主義の影響のもとに、親の決めた婚約者を待ち続ける一生を送って、狂して餓死するという悲惨な結果に至った。

しかし、そのような悲惨な娘を「狂念によって永遠に明日を見出してゐる女」と「私」が賛美している。二十年の長い時間をも待ち続ける沈女は愛情への期待と人間に対する信頼感を抱き続けている。親の過保護のもとに、人間の悪い面を見ることがない沈女は権力や財力に媚びる人を見抜かず、親からもらった「女誠扇」に書かれた「専心」と「一女不事二夫」という倫理観を最後まで貫く。封建的な生き方を貫く沈女は「永遠に明日を見出す女」として、その精神を胸に、花嫁姿で廃屋に留まっていた。

### 三、階級差別のもとに生きた下婢

下婢が初めて登場するのは、「私」たちが廃屋で声を聞く場面である。最初から最後まで、下婢は姿を見せず声を出すだけだがそのストーリーの中に重要な役割を果たす。「私」が「世外民」と一緒に廃屋に入ると、突然に女の声がして、泉州語で「なぜもっと早く来ないの？」と聞こえた。人が住んでいると思った「私」と「世外民」は、外の老婆に聞き、沈家の伝説を知った。幽霊を信じる「世外民」と謎を解きたい「私」はもう一度廃屋を訪れ、「女誠扇」を見つけた。「女誠扇」を拾った「私」は、「奔放無智な娘をひとり空想する」。「彼女は本能の導くがままに凄惨な伝説の家をも怖れない。また昔、その上でどんな人がどんな死をしたかを忘れ果ててあの豪華な寝床の上に、その手には婦女の道徳に就て明記しました暗示

したこの扇をそれが何であるかを知らずに且つ弄び且つ翻して、彼女の汗にまみれた情夫に涼風を贈ってゐる……。」<sup>5</sup>と「私」は思い描く。親からもらった「女誠扇」を持つ沈女は夫を待っているうちに狂って死んでしまった。その「専心」と「一女不事二夫」を暗示する「女誠扇」は何らかの理由で下婢の手に渡った。

当時の台湾社会階級における下婢は、片岡巖の『台湾風俗誌』の第二章「台湾人の階級」によると、「台湾に上九流下九流なるものあり、之れ人の階級を定めたるものにして、上九流は士農工商などと同等若しくは以上の待遇を受くるものにして、下九流は賤民として世に軽視され、婚姻及び交際などは上九流以上の人と為すはず、従つて社会に容れざるものにして、彼たち間に於てのみ交際をなすものとす。(中略)又其身は現に下九流にあらざる父母、祖父母、此階級にありしものは下九流を以て準ずるものとす。」<sup>6</sup>と説明されている。また、下婢は下九流の第七階級で、「僕婢は即ち奴僕、下婢にして昔之れ等の人格を認めず、恰も一家の財産とせられたり、ゆえに家長若し財産没収に遭ふときは奴婢も当然没収せられ、家長破産するときは奴婢は他に売却せられ其身価は債主に歸しものなり。(中略)台湾に於いて奴を奴才と云ひ、昔は買断して奴となせしも今は奴才を使役するもの無しというとも買断して婢女となすもの頻繁に行わる、今尚此風あり、此を査媒嫗と云ひ、名を結婚に借りて売却する」<sup>7</sup>と書いている。他にも、新垣宏一の『砂塵』もその旧習について書いている。「『女誠扇綺譚』の下婢は幼く孤児となり、隣人である穀物商の黄家に拾われて養育されているのである。幼い時、財産として他人に売却されて、下婢になるのは、昔の台湾ではよく見られる現象である。この小説の中に孤児であったものが拾われたのは特別な境遇で、小さい時に金で買われたものが多いのである。(中略)それらによれば、往時清朝の官府でも、婢女の売却による陋習を矯正しようと努め、金で買った女

婢でも二十三歳以上になれば婚配を撰ぶ。このような習慣が未だに残っている。」<sup>8</sup>と二〇〇二年に新垣宏一が述べている。

生まれた時から、社会的地位が低い下婢は何の自由も持たず、主人の意志によって売却される。それが台湾の旧習の一つである。社会的には父権社会と下層階級との束縛のもとに育てられた下婢は教育を受けることもなく、教養も当然ない。そのような環境に育まれた自分の意志によって動いている下婢を、「野性によって習俗を超えた少女」<sup>9</sup>であると「私」は評している。自由恋愛の権利を持たない下婢は自然の欲望によって、世俗の枷にとらわれることなく、倫理の線を超えた。廃屋の幽霊の伝説も怖れず、自分の愛する人と会って、「女誠扇」を用いて恋人に涼風を送る。「彼女は生きた命の氾濫にまかせて一切を無視する。——私はその善悪を説くのではない。「善悪の彼岸」を言ふのだ……。」<sup>10</sup>とあるように、下婢に対して、「私」は正しいことや間違つたことなどを批評しない。ただその伝統的な観念を破つて、個人の危険な状態等と衝突することを恐れず、自らみなすものに積極的にアプローチする姿であると「私」は述べている。

そして、ストーリーの最後に、「この記事を書く男は、台湾人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦点を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた。」<sup>11</sup>とある。当時の台湾では統治者の意識が文化戦略面に集中していたのである。大正九年には地方行政制度改革に伴い伝統的地名を内地風に改称、また内地人、台湾人間の婚姻、縁組の届け出を受理する通達も出した。自由恋愛や結婚などの権利を持たない下婢が自分の意志によって廃屋で恋人と会い、資本者の主人の命令に反抗して、日本人に嫁することを断つて、自らの命を絶つのである。そのようなことは当時の日本人にとって、非常にあり得ないことであつた。当時の統治者としての日本人は帝国主義の観念のもとに、自らの地位の上昇を感じ、

誇りも高めていた。内地延長主義が行われていても、台湾人より内地人の地位は一層高いものと思っていた。内地人と結婚するのを拒まれるとは思っても寄らない。「私」の同僚である「この記事を書く男」は、そのような日本人として描かれている。そのため、「それが不都合であるかの如き口吻」でこの記事を作っていた。

さらに、下婢の死については、姚巧梅が、自由意志を最後まで貫こうとする女婢が、結局奉公する主人の命令に反抗して自殺してしまうことに対して、植民地支配と伝統的家父長制の重圧に抵抗する台湾女性の「ナショナルリズム」と自我形成を読み取っている<sup>12</sup>。これらは、藤井省三によると、「男の残した扇の『女誠』の戒めに従い、内地人すなわち統治民族である日本人に嫁することを拒んで自殺する台湾人「下婢」という解釈してきた。彼女の死は、自らの恋に殉じたことで、『妻に二適の文無し』の文言が訓戒するところを体現したかに見える。」<sup>13</sup>と読み解かれている。下婢は主人が支配した婚約を拒んで、自ら秘めた恋人の後を追いかけていたのだが、逆に見れば、恋人の他に嫁することを断るのも、一つの「専心」の体現ではないかと思う。教育を受けることもない下婢は「女誠扇」の書いた道理を読み取れなかったが、沈女と同じように、その精神を貫いたとは言えるだろう。また、下婢が日本人との結婚を拒んだために死を遂げたことも「台湾ナショナルリズムの誕生を逆説的に宣告した」と藤井省三が論じた<sup>14</sup>。この悲劇は確かに父権社会の権威や植民地支配のもとに起こったのである。下婢との婚姻が主人と日本人との間で取引の道具とされた可能性もある。異民族との婚姻を拒んだ下婢の死は近代女性の自覚とも言えるだろう。

#### 四、二人の女性と扇のイメージ

廃屋に聞こえる謎の女の声に始まり、このストーリーは展開していくのである。日本人記者

に設定された「私」が台湾人の親友である「世外民」と台南の街で遊覧した時、ある豪壮な廃屋を見つけて中に入り、ある女性の声を聞いた。廃屋の外にいた老婆に聞き、昔の植民地暴富者の沈家の盛衰とずっと会ってない夫を待っている凄惨な沈女のことを知った。廃屋に幽霊がいると信じる「世外民」と、幽霊を信じない合理主義の「私」は、真実を知りたい気持ちに駆られ、もう一度廃屋に戻って、謎を解こうとする。廃屋を再訪すると、女の声は聞こえず、ある「女誠扇」を発見した。その扇に書かれていた曹太家<sup>15</sup>の『女誠』の専心章には、「一女不事二夫」という伝統的道德観が説かれている。

「女誠」という教えは、その後中国のみならず日本でも、女性を強制する規範として働いた。例えば、明和九年十二月『女四書』<sup>16</sup>のうちにも収録されている。こうした箇所を読むと、読者は作品を逸脱して、どうしても生身の春夫の心情を思いやらずにはいられなくなってくる。台湾、中国への旅が、谷崎潤一郎夫人の千代子への恋故の旅行であったことは今よく知られていることである。「女誠」との関わりでは「これを春夫の恋する千代に当てはめれば、いくら夫谷崎から虐待され、言い寄る春夫の熱によって恋に目覚めたとしても、姉初子や妹せい子と異なり従順な性格で、子までなした身で、いったん嫁いだ家から、自らの意志で離れることは困難と考える<sup>17</sup>」と論じられている。そして、『剪られた花』で、「夫はどこまでも夫であるから妻たるものはどうしても夫の意志に従ふより外はなさそうであるといふかの女の考へ方」と描かれた千代は、「女誠」を体現する女性だったと思われる<sup>18</sup>。親から娘に与えられた扇は、娘の貞淑を願う旧時代的な親の期待を暗示する。婚約者に裏切られた沈女が狂死した時、扇を手にしてたというくぐり地位の低い女性が男性中心の制度と道徳に屈服させられることを示唆する。

続いて、「私」はその女の声から「奔放無智な娘をひとり空想」して、ある日、ある男が廃屋に

縊死したニュースを聞く。「私」は「世外民」になぜ人が通らない廃屋にある男の屍体が発見されたのかと尋ねる。「世外民」は黄という姓の穀物商の娘が偶然に夢で見たからだと言う。靈感を持つ女だという噂が人々に伝わっていたが、「私」は信じず、穀物商を訪ねた。娘に会え、扇を突きつけて聞くと、物事が意外な方向に展開した。帳の後ろから「ただあなたが拾っておいでになったその扇——蓮の花の扇を私に下さい。その代りには何でもみんな申します」と一人の女が声を出したのである。「私」はただ扇を返して、何の報いも情報も求めず、そこを離れた。数日後、穀物商の下婢が主人の世話した内地人に嫁にすることを嫌って、罌粟の実を多量に食って死んだという記事が書かれることになった。

扇に書かれた「女誠」は間接的に植民地台湾に生きる女の階級を表している。「階級差における抑圧と被抑圧の中では、女性の方が男性より重層的な被抑圧の境遇に置かれている。」<sup>19</sup>と姚巧梅は述べている。要約し援用するが、それは日本の植民地台湾の状況に関わる問題だけではなく、アジア地域での父権社会における女性の社会的境遇と歴史的環境などの問題も関わっている。これらが結果的に、彼女らの死に繋がる主な原因になると考えるのにも賛同する。

## 五、結び

『女誠扇綺譚』は周到に練り上げられた作品で、「扇」は「女誠」という「専心」の意味を表して、二人の女性が自らの生き方によってその意味を体現してきた。『綺譚』は「扇」を通して、二人の女性の姿を繋いでいくのである。成長環境が全く違う二人の女の手元にあった「扇」が鍵となって幻想的なストーリーが展開していく。「扇という小道具をめぐる女性の恋と死に関する描写は、浪漫主義的芸術性を孕みながら、時代環境を踏まえつつ、封建社会と他民族の支配の下に置かれた台

湾女性達の境遇を通して、自我、社会、民族という厳粛な課題を浮き彫りにしている。」<sup>20</sup>と言えるだろう。台湾の旧習や女性の苦しみや植民地統治の環境や伝統的な父権制度のもとに、当時の女性は社会での位置付けがはっきり表される。

また、ストーリーの最後に、「私」の同僚は下婢が日本人に嫁することを嫌って自殺したという所に重点を置いたとある。ここには、異文化に生きた春夫の日本と台湾との民族問題に対する関心が見える。支配者の立場から植民地についての現象を批判する「私」の同僚と違って、民族問題の角度から見る佐藤春夫の姿が見られる。

### 参考文献

- 『定本佐藤春夫全集第27巻』・佐藤春夫著・京都市・臨川書店・2000
- 『台南文学』（日本統治期・台南日本人作家群像）・大東和重著・大和出版印刷株式会社・2015
- 『臺灣風俗誌』・片岡巖著・臺北市・南天書局・1994二刷
- 『台湾純文學集』・星名宏修・中島利郎編・東京都・綠蔭書房・2002
- 『台湾文学この百年』・藤井省三著・東方書店・1998
- 『台湾新報』237号・「佐藤春夫氏の「女誠扇綺譚」・島田謹二・1939年9月
- 『社会文学』17号・「植民地台湾に見る女性像—佐藤春夫〈女誠扇綺譚〉における沈女と下婢」・姚巧梅・2002
- 『日本近代文学』75号・「佐藤春夫女誠扇綺譚論—或る〈下婢〉の死まで」・河野龍也・2006

### 注

- 1 『台南文学』（日本統治期・台南日本人作家群像）・大東和重著・大和出版印刷株式会社・2015
- 2 『社会文学』17号・「植民地台湾に見る女性像—佐藤春夫〈女誠扇綺譚〉における沈女と下婢」・姚巧梅・2002
- 3 『台湾文学この百年』・藤井省三著・東京都・東方書店・1998
- 4 同掲2
- 5 『定本佐藤春夫全集第27巻』・佐藤春夫著・京都市・臨八書店・2000
- 6 『臺灣風俗誌』・片岡巖著・臺北市・南天書局・

1994

- 7 同掲 6
- 8 『台湾純文學集』・星名宏修・中島利郎編・東京都・綠蔭書房・2002
- 9 同掲 5
- 10 同掲 5
- 11 同掲 5
- 12 同掲 2
- 13 同掲 3
- 14 同掲 3
- 15 中国、後漢の文人。扶風安陵（陝西（せんせい）省）の人。班固・班超の妹。曹世叔に嫁したが、夫の死後、和帝の詔により、兄の「漢書」編纂を引き継いで八表と天文志を完成した。「女誠」7編、「東征賦」を著す。班昭。曹大姑（そうたいこ）。生没年未詳。
- 16 女性のための教訓書4種を集めたもの。江戸前期に辻原元甫（つじはらげんぽ）が和訳した「女誠（じょかい）」「女論語」「内訓」「女孝経」の4種。
- 17 同掲 1
- 18 『台湾新報』237号・「佐藤春夫氏の「女誠扇綺譚」」・島田謹二・1939年9月
- 19 同掲 2
- 20 同掲 2